

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：32633

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25893245

研究課題名(和文)看護系大学学生の自律的学習力の開発に向けた基盤的研究

研究課題名(英文)A basic research for the educational program of professional development competency towarded baccalaureate nursing students.

研究代表者

三浦 友理子(MIURA, Yuriko)

聖路加国際大学・看護学部・助教

研究者番号：70709493

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：看護師の学び方を学習するプログラムを展開する基盤的知識を得るために、学生が使用している学習方略の性質、使用程度、関連要因を明確にすることを目的とした。看護学生は実習を通し、省察の重要性は認識しているが実施の程度には個人差があったこと、向上志向的学習方略の使用が少なく大学での課題の範囲で学習する様子が認められたこと、情報を収集するリソースとして論文等を用いる機会が少ないこと、および臨床の場での協同学習の経験が少ないことが明らかになった。以上より、省察、学ぶ場の拡大、モチベーションのコントロール、エビデンスの収集方法、および協同学習の具体的方法を強調したプログラムを構築する必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to obtain fundamental knowledge to develop the “Learning to Learn for nursing students” program, by elucidating the features of nursing students’ learning strategies(LS), degree of LS use, and correlated factor with LS use. The 4 features of the nursing students’ LS use were identified through this study. 1)They recognized the importance of reflection on practice, but there were a difference in degree of implementation of reflection with each student. 2)The learning environment remained limited to course work of their college. 3)There were little opportunities to use literature as the information resources. 4)The nursing students’ learning in the practicum didn’t always emerge as the collaborated learning. Research findings suggested that it’s important to design the program that emphasize concrete strategies for reflection, expanding the learning environment, controlling their learning motivation, collecting the evidences, and collaborated learning.

研究分野：看護教育学

キーワード：専門職開発 自己調整学習 学習方略 自律的学習 主体的学習 自己研鑽 看護学士課程 看護教育

1. 研究開始当初の背景

我が国は高齢社会を迎え、終末期ケアも含む生活の質を重視した在宅医療および介護の推進事業（厚生労働省、在宅医療・介護あんしん 2012, 2012）が展開されている。また、病院で療養を行う患者の重症化には拍車がかかり、現場での看護は高度かつ複雑化している。看護師が医師又は歯科医師の包括的な指示の下、診療の補助を行う場合の仕組みのあり方について議論が重ねられ、平成 23 年 3 月には「特定行為に係る看護師の研修制度（案）」（厚生労働省、2013）が報告された。医療を取り巻く様々な課題を改善する糸口として、看護職者には新たなより高度な役割を担うことがさらに現実化しているといえる。以上のような役割拡大に対応するためには、看護師一人ひとりが高い看護実践能力を有していることが不可欠であり、日々変化していくシステムや知識を学習し、役割に適する看護実践能力を継続的に開発していくことが必要である。

看護実践能力とは、知識や技術を特定の状況や背景の中に統合し倫理的で効果的な看護を行う能力（松谷ら、2010）とされる。看護実践能力を構成する諸要素を分析した研究では、アセスメント力、ケア提供力、およびコミュニケーション力などとならび、自己啓発力や専門職能開発力という自律して学習する能力が必要であることが提示されている（e.g. Cowan et al., 2006）。これは、看護師が日々変化する社会システムの中で、新たな知識や技術を患者への看護実践に積極的に適用するために、既存の能力を刷新していく自律的な学習を継続することが重要視されていることを示唆している。一方で、自律的学習力は生涯継続して発達させる能力であるとされる（Sbhmitt & Sbhmitt, 1997）。つまり、看護師として就業する以前から涵養されてきた学習習慣や学習方略が、看護師になった後の学習に影響を及ぼすということである。よって、学生時代に自律的学習力を高めておくことは将来の生涯学習につながる重要な要素といえる。

本研究計画に先立ち、研究者は病院で働く臨床看護師の自律的な学習を可能にする方略について研究を行った（三浦、2012）。これによると臨床看護師の学習方略の側面には、実践をもとに省察を行うという側面、役割を獲得するなどより意識的に学習を促進するという側面、自己学習をする際に用いられる情報を収集し統合する、およびスキル人的資源を活用する際の協同学習的な側面が示された。これは、一般の大学生を対象に調査されたカテゴリー（伊藤、2009）とは相違が認められた。看護師は実践の省察を行いながら、経験をチームで共有することによって学習を拡大している。このような動的な学習である性質により、多様な学習方略を使用している様子が示されたものと推察した。看護系大学生は、講義だけではなく、実際の対象者が

存在する場で実習という形態の学習を行う。実習での学習プロセスと看護師となつてからの学習プロセスは、場や背景がある学習であることや知識、技術、態度が統合された学習である点で共通点があり、将来につながる学習方略として重要視される。

以上から、看護系大学の学生が、実習において自律的に学習を行う方略を習得することで、将来看護師として働きながら自律的に学習する能力の基盤を育成していく必要性が認められた。現在は、学習方略は各看護学領域の学習に埋め込まれており、学生が自らの学習方略を認識化することは少ない。大学生に学習方略をトレーニングするプログラムは、学業成績や生涯学習スキルを向上させることが確認されており（e.g. Pintrich et al., 2000）、授業形態や学習内容に特徴がある看護学学士課程での学習に内容を適用させた上で「学ぶための学習プログラム」を施行することは、社会からの役割拡大の要請に対応する看護師の基盤を育成することにつながると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、看護師として学ぶための学習を展開する基盤として、自律的に学習している看護学生の特徴、使用している学習方略、影響する人的・環境的要因を明確にすることを目的とする。本研究の目的に到達するために、（1）看護系大学の学生が実習において用いている学習方略のアイテムをインタビュー調査によって収集すること、および（2）看護系大学の学生が実習において使用している学習方略の程度と人的・環境的要因との関連性を検証することを目標とする。

3. 研究の方法

（1）看護系大学生の看護学実習で用いられる学習方略についてのインタビュー調査
対象者は、便宜的に抽出した看護系大学の看護学を専攻する学生であり、看護学実習を経験し 3、4 年次の学生である。データ収集はインタビューガイドに基づく半構成的インタビュー法を用い、1 人につき約 60 分の面接を 1 回行った。質問内容は、「学内で行う学習と実習中に行う学習との相違点と類似点」を聞き、それぞれの回答に対し「それに対応する学習方略や学習上の工夫」について質問をした。また、「実習のなかで学びが大きかったエピソード」を聞き、「そこで用いられた学習方略」について質問した。

研究協力者に許可が得られた場合、インタビューは IC レコーダーにより録音し、逐語録を作成した。得られたデータは看護師の自己調整学習方略の下位概念（省察的学習方略、向上志向的学習方略、情報収集統合方略、協同学習方略）をもとに内容分析の手法を用いて分析を行った。なお本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認（13-079）を得て実施した。

（2）看護系大学生の自律的学習の使用程度と関連する要因の検討

対象者は、日本看護系大学協議会の会員である看護系大学 216 校から無作為に 125 校抽出し協力の同意が得られた 46 大学に在籍する 3 年次の看護学臨地実習を終えた学生である。調査は無記名自記式質問紙により行った。看護学生の自律的学習は「看護師の自己調整学習方略尺度 (Self-Regulated Learning Strategy Scale; SRLSN scale)」を看護学生向けに文言を修正し 34 項目にて測定した。本尺度は、自律的な学習を可能にする学習方略の使用の程度を測定するものであり、この程度が高いことは自律的学習が多く行われていることを意味する。文献検討より自律的学習に関連する要因として、将来への展望の有無、性格特性 (社会的外向性、活動性、持続性)、看護や学習に対するモチベーション (看護および仕事に対する期待と価値、責務認識)、学習に対する支援システム (施設、人的資源)、タイムマネジメント行動の計 41 項目を設定した。従属変数である SRLSN scale 合計点の 50 パーセンタイル値は 118 点であり、高群を 118 点以上、低群を 118 点未満に設定し、多重ロジスティック回帰分析を行った。なお本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認 (14-094) を得て実施した。

4. 研究成果

(1) 看護系大学の学生が実習において用いている学習方略

本研究の協力者は 4 名であった。省察的学習方略では、省察を意識的に行っている者、あまり意識なく行っている者、苦手であるが重要性は感じている者がいた。意識的に行っている者は、親からの働きかけの影響や社会人として働いていた経験から、「実習で出会ったからには少しでもよい看護を受け取ってもらいたい、そのためには自分が変わるしかない」という考えがある。そのため、改善点とできていた点を両方認識して、不足部分をポジティブにとらえるように工夫しているという。また、あまり意識せず行っている者は、「毎日行くからには患者の何かを改善しなくては」という思いがあるため、自分のかかわりをどう改善するか考えることは自然な行為であると述べていた。情報収集統合方略では、情報を提供してくれる人、情報収集のリソースや収集方法、情報の取捨選択方法、学習目標や学習のゴールを意識した学習について述べられた。情報収集のリソースや収集方法に関しては、シナリオ学習の機会などから実習前にすでに確立していた者がいた。病態や看護についてそれぞれ複数のリソースがあり、それを活用したことが効率の良い時間の使い方を可能にしたとしている。さらに、看護計画を立案する上で商業雑誌がかなり役立つと認識されていること、多くの学生が活用していることが述べられた。また、患者がどのような人物かということに関しては、主観的データを客観的データに先立ってじっくり読み込む者や、看護師や介護士とうまくコミュニケーション

をとり情報を収集する者がいた。情報の取捨選択方法に関しては、インターネットにおける情報の精度や、対象者の少なさ等研究結果の妥当性に注意を払って使っている者がいた。学習目標や学習のゴールについて、学習を始めるまえに把握する習慣のある者がいた。大学入学後の授業で、教員が講義の前に目標を提示したことをきっかけに、目標の達成を目指した学習を行うことの有効性に気づいたという。

向上志向的学習方略は、1名の学生が語っていた。彼女は「色々な経験を積んだ患者に看護をするため、看護学だけを学んでいるだけでは太刀打ちできない」仕事であることを今までの学習から感じており、違う分野の読書、勉強会への参加、旅行などを行っていた。これにより将来の豊かな看護に結び付けたいと考えていた。

協同学習方略については、協同学習を促進する要因、学習における他者への認識、精神的支援、意見交流について述べられた。実習では担当する患者がそれぞれ違うことから課題は様々であり、カンファレンスなどフォーマルな場で行われている状況であった。協同学習を促進する要因は、学生間のチームワークを強調する教員の指導、実習メンバーの学習へのモチベーションの高さであった。学習における他者への認識は、よきライバル、何かしら尊敬できる存在、励まし合う存在であった。精神的支援は、休憩時間や実習後などに患者への看護がうまくいかない不安や焦りを友人に話し、聞いてもらうことで自らの気持ちを整理することであった。学生にとって実習を続けていくエネルギーになる場合もあった。意見交流は、アイデアや意見の相違から行き詰っていた計画に示唆が与えられるという効果があり、カンファレンスが学びを深める場として活用されていた。

新たな方略として、支援要請方略が挙げられた。これは、協同学習方略の一部とも考えられるが、コード数が多く新たなカテゴリーとして提示した。これは、質問する相手、タイミング、質問の仕方であった。看護学生として不明部分を確認する責任を認識していること、物事をうやむやにしない性質などが本方略を促進する要因として述べられていた。以上のことから、自律的学習力を育成するプログラムの強調点として 省察することの価値と有効性に気づきをもたらす、メタ認知的視点ならびにリフレクション方法の獲得

向上志向的学習の有効性と具体策の獲得 エビデンスが確保された情報収集方法、具体的リソースの獲得 協同学習の要素を取り入れた授業改善 支援要請方略の具体的方略の獲得とする有効性が示された。

(2)-1 看護系大学の学生が実習において使用している学習方略の程度
質問紙回収数は 1210 部 (回収率 57.4%) であり、有効回答数は 1151 部 (有効回答率 95.1%) であった。

省察的学習方略の使用程度の平均値は 3.07 であり、全 13 項目のうち 4 以上を示す項目は 2 項目 (15.4%)、3 未満を示す項目は 0 項目 (0%) であった。

向上志向的学習方略の使用程度の平均値は 2.89 であり、全 9 項目のうち 4 以上を示す項目は 0 項目 (0%)、3 未満を示す項目は 5 項目 (55.6%) であった。

情報収集統合方略の使用程度の平均値は 3.77 であり、全 7 項目のうち 4 以上を示す項目は 1 項目 (14.3%)、3 未満を示す項目は 0 項目 (0%) であった。

協同学習方略の使用程度の平均値は 3.52 であり、全 5 項目のうち 4 以上を示す項目は 1 項目 (20.0%)、3 未満を示す項目は 0 項目 (0%) であった。

向上志向的学習方略の使用程度が他に比べて低く、本方略の強化の必要性が示唆された。

(2)-2 看護系大学の学生が実習において使用している学習方略に関連する要因の検討
多重ロジスティック回帰分析によって自律的学習に関連する要因の探索を行った結果、モデルの説明変数として、将来の展望 希望あり、社会的外向性、看護に対する期待と価値、学習に対する期待と価値、責務認識、人的資源、および タイムマネジメント行動 に有意性が認められた ($p < 0.01$)。また、対数尤度を用いて算出された Cox-Snell $R^2 = .36$ 、Nagelkerke $R^2 = .48$ であり、予測的中率は、SRLSN 合計点低群で 78.5%、高群で 78.5% を示した。オッズ比は、将来の展望 希望あり 2.00、社会的外向性 1.12、看護に対する期待と価値 1.14、学習に対する期待と価値 1.30、責務認識 1.40、人的資源 1.06、および タイムマネジメント行動 1.21 を示した。

また、重回帰分析により同一因子の有意性 ($p < 0.05$) と決定係数 $R^2 = .55$ を確認した。

自己調整学習 (自律的学習) は、モチベーション、メタ認知、および学習方略によりフィードバックループがうまく機能している際に生起する。本研究から、モチベーションを成立させる期待や価値、学習方略に位置づくタイムマネジメント行動は既存の知見を裏付ける結果が得られた。また、将来の目標があること、学習を支援する人的資源があること、人的資源をうまく活用する個人特性 (社会的外向性) の有用性が新たに示された。一方で、本研究で取り扱った要因は看護系大学生の自律的学習を 55% 程度説明しており、学習習慣等更なる要因を探索する必要がある。

(3) 研究成果のまとめ

本研究は、看護師として学ぶための学習を展開する基盤的知識を得るために、学生が使用している学習方略の性質、学習方略の使用程度、関連する人的・環境的要因を明確にすることを目的として行った。研究の結果、省察はその重要性は認識しているもの取り入れられている学生とそうでない学生がいたこと、向

上志向的学習方略の使用が少なく大学での課題の範囲で学習を進めている様子が見られたこと、情報を収集する際のリソースとして論文等を用いる機会が少ないこと、および臨床の場での協同学習の経験が少ないことが明らかになった。以上より、省察、学ぶ場の拡大、モチベーションのコントロール、エビデンスの収集方法、および協同学習の具体的方法を強調したプログラム化を行うことの必要性が示唆された。

引用文献

厚生労働省 (2012) 在宅医療・介護あんしん 2012

http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/zaitaku/dl/anishin2012.pdf [最終閲覧日 2015.06.15]

厚生労働省 (2013) 「特定行為に係る看護師の研修制度 (案)」

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r985200002yg50-att/2r985200002yg6h.pdf> [最終閲覧日 2015.06.15]

Cowan, D. T, Barnett, J.W, & Norman, I.J. (2006). A European survey of general nurses' self assessment of competency. *Nurse Education Today*, 27, 452-458.

伊藤崇達 (2009). 自己調整学習の成立過程 学習方略と動機づけの役割, 北大路書房
松谷美和子, 三浦友理子他 (2010). 看護実践能力 概念、構造、および評価. 聖路加看護学会誌 14(2), 18-28.

三浦友理子 (2012). 看護師の自己調整学習方略尺度の開発 構造方程式モデルによる妥当性と信頼性の検討, 聖路加看護大学博士論文.

日本看護協会 (2013). 看護関係統計資料集 / 厚生省医務局看護課監修, 日本看護協会出版会.

Pintrich, P. R. (2000). The role of motivation in self-regulated learning. In M. Boekaerts, P. Pintrich, R. & M. Zeidner. *Handbook of self-regulation*, 451-502.

Schmitt & Schmitt (1993). Identifying And Assessing Vocabulary Learning Strategies. *Thai TESOL Bulletin*, 5 (4): 27-33

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

該当なし

[雑誌論文](計 0 件)

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

該当なし

出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 友理子 (MIURA, Yuriko)
聖路加国際大学看護学部看護教育学助教
研究者番号：70709493

(2) 研究分担者

該当なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

該当なし ()

研究者番号：